

風姿花伝第二、
物学ものまね条々
鬼

これ殊ことさら更大和やまとの物なり。一
大事なり。凡およそ怨靈をんりやう憑つき
物などの鬼は、面白をもしろき便たより
あれば易やすし。応対あひしらひ者を目
かけて、細こまかに足手つかを使つかひ
て、物頭ものがしらを本ほんにして、働はたらけ
ば、面白たよりき便あり。誠めいの冥

〔口訳〕

鬼の物真似は、大和猿樂の特有の芸である。殊に重大なむづかしいものである。一体に、同じ鬼でも、怨霊や憑き物等の鬼は、面白く演じる便りがあるから演じ易い。あひしらひの者を目かけて、細かに手足をつかひ、物頭ものがしらを本として働くやうにすれば、面白く演じる便りがある。所が、真の冥途の鬼は、上手に模すればただ怖ろしいばかりで面白さは全く欠けてしまふ。これは実は、あまりにむづかしいので、それで面白く演じ得る者が稀なのであらうか。先づ鬼の本領は強くて怖ろしく

途^との鬼^{おに}善^よく学^{まな}べば、恐^{おそ}ろし

き間^{あいだ}、面白^{おもしろ}き所^{ところ}更^{さら}になし。

誠^{まこと}は、余^{あま}りの大事^{だいじ}の態^{わざ}なれ

ば、是^{これ}を面白^{おもしろ}く為^する物^{もの}稀^{まれ}な

る歟^か。先^{まづ}本意^{ほんい}は、強^{つよ}く恐^{おそ}ろ

しかるべし。強^{つよ}きと、恐^{おそ}ろ

しきは、面白^{おもしろ}き心^{こころ}には変^かは

れり。

抑^{おさ}、鬼^{おに}の物^{もの}真^ま似^ね、大^{おほ}な

る大事^{だいじ}あり。能^{よく}為^せんにつけ

て、面白^{おもしろ}かるまじき道理^{道理}あ

り。恐^{おそ}ろしき所^{ところ}、本意^{ほんい}な

り。恐^{おそ}ろしき心^{こころ}と、面白^{おもしろ}き

とは、黒^{くろ}白^{びやく}の違^{ちが}ひなり。さ

なければならぬ。所がこの「強くて怖ろしい」といふことは、面白いといふ感じとは、非常な相違である。

元来、鬼の物真似には、非常な難問
題がある。それは、上手に演ずれば
演ずるほど、面白くなるといふこ
とである。鬼は怖ろしい所が本領であ
る。所が、怖ろしい心と面白いといふ
心持は、黒白の違ひである。だから、
鬼を演じて、それで面白い所がある役
者だつたら、それは能を究めつくした
上手といふべきであらう。しかしなが
ら、鬼能だけが上手なといふ役者は、
特別に花といふことを知らぬ役者であ

れば、鬼の面白き所あらん
為手は、究めたる上手とも
申べき歟。さりながら、鬼
神を能く為ん物は、殊更花
を知らぬ為手なるべし。さ
れば若き為手の鬼は、よく
為たりとは見ゆれ共、面白

らう。それで、若い役者の鬼は、たと
ひ上手に演じたやうに見えても、一向
に面白味はないものだといふわけがあ
る。更に言へば、鬼能ばかりが上手な
といふ役者は、その鬼能も面白くはな
いものだといふ理由がありさうに思へ
る。これは精しく研究しなくてはなら
ない。ただ「鬼の面白い」といふこと
を研究してみると、「巖に花が咲いた
やうだ」といふ一言に尽きる。

からぬ理あり。鬼ばかりを
善くせん物は、鬼も面白か
るまじき道理あるべきか。
精しく習ふべし。たゞ鬼の
面白からん嗜み、巖も花の
咲かんが如し。

怨霊憑物などの鬼が、面白き便りがあるから、容易であるといふことは、前の物狂ひの憑物の条を参照すれば、極めて明白になるであらう。又その面白さの手だては、その次に「あひしらひを目がけて云々」といふ語があつて、具体的にも説かれて居る。

問題は、怖ろしい鬼を面白く思はせる公案である。これに関しては、

鬼の面白い所のあるシテは、究めたる上手といふべきである。

鬼ばかりを上手にするシテは、花を知らぬシテといふべきである。

若きシテの鬼は、上手に演じて、面白からぬ道理がある。

鬼ばかりが上手なシテは、鬼も面白くない道理がある。

といふ四つの暗示的な表現だけで、最後の説明はわざと略してある。そしてそれは公案として残され、解決は、別紙口伝に於て与へられてゐる。曰く、

鬼ばかりを善くせん者は、鬼の面白き所をも知るまじきと申したるも、物数をつくして、鬼を珍らしくし出したらんは、珍らしき所花なるべきほどに、面白かるべし。余の風体はなくて、鬼ばかりするを上手と思はば、善くしたりとは見ゆるとも、珍らしき心あるまじければ、見所に花はあ

るべからず。「巖に花の咲かんが如し」と申したるも、鬼をば、強く怖しく肝を消すやうにするならでは、凡その風体なし。これ巖なり。花といふは、余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と、人の思ひ慣れたる所に、思の外に鬼をすれば、珍らしく見ゆるところ、これ花なり。然れば、鬼ばかりをせんずるシテは、巖ばかりにて、花はあるべからず。

結局、鬼の花は、珍らしきにあるといふのである。説きつくし得て余蘊なしといふべきである。鬼ばかりを上手にするシテに花がなく、鬼も面白くないのは、結局それが度々やられる為に、見物に珍しき感がない

による。又年若きシテの鬼に面白味のないのも、これはまだ「余の風体を残さずして、幽玄至極の上手と、人の思ひなれ」てゐない故である。鬼を面白く演じ得るシテは、究めたる上手であるといふのは、その人が、すべての風体を残さずして、幽玄至極のシテと見物に思はれて居るに依るのである。

この鬼の物真似は、後年の二曲三体絵図には、更に二つに分けられて、碎動風鬼と力動風鬼の二つとせられ、碎動風までを学ぶべく、力動風は稀にのみ演ずべきことを力説してゐる。この二分説と、憑物の鬼と冥

途の鬼との二分説とを、比較して見れば、更に面白いであらうと思ふ。

底本：国立国会図書館デジタルコレクション『世阿弥十六部集評釈 上巻』能勢朝次 著